

春  
夏  
秋  
冬

# 台湾徒然



柳本通彦

## 第二回 おちおち寝ていられない「快樂台湾」

先日台湾紙の朝刊トップにでかか  
と掲載されたのは、「極楽台湾」という日  
本の雑誌「台北娼婦街 熟女ムアには  
たまりません」といった風に面白おかし  
く台湾各地の風俗産業を写真入りで紹介  
したものだ。日本の一流週刊誌ではよ  
くあるパターンなのであるが、少々刺激  
が強すぎたのか、早速台北市議会で槍  
玉にあがった。



一面トップを飾った「極楽台湾」

もともと議員がこの雑誌を取り上げ  
たのは台北には「ピンク産業がこれほど  
はびこっていると、市長を追及するため  
であった。おりしも、市当局は警察の尻  
を叩いて不法売春の取締りに躍起になっ  
ている時期だったので、ちょうど振り向い  
た馬英九市長の顔を濡れ雑巾で、ぶた  
く格好になった。

激昂した市長は何を血迷ったか、日本  
政府の代表部 国交がないので、交流協  
会（）に抗議を申し入れ、日本人買春客  
を一網打尽にすると息巻いた。風俗取締  
りが日本人取締りに変貌し、浄化運動  
が反日運動にすり替わったわけである。

背景には台湾の「黄色汚染」の深刻さ  
がある。「黄色」は好色を意味する。散  
髪屋からサウナ、パブ、クラブに至るま  
で、「正常」なる店と「黄色い」店とは、外  
から見る限りほとんど区別なく、外見  
は高級クラブでも、おじさんが半裸の女

の子を膝に乗せていたり、最高級ホテル  
の従業員が売春の斡旋をやっていたり、  
日常生活とセックス産業が分け隔てなく  
同じ空間にあるのが台湾の特徴である。  
警察は「けつこつ頑張」している。なにし  
る、「臨検」と称し、いきなりお店の中やホ  
テルの部屋に入ってくる。夫婦でも寝る  
時は枕元にバスポートを置いて、お巡り  
さんについても二人の身の潔白を証明で  
きるよう用意しておかねばならない。台  
湾のホテルは、当節つかつかと寝てはお  
れないのだ。

市長の唐突な言動の裏には、当面、追  
及の矛先をかわそうという狙いもあるの  
だが、悪いことは日本人のせいにしてお  
けばいいという半世紀にわたる「伝統」も  
なきにしもあらずだ。台湾は、日本の植  
民地支配を脱したあと、さらに外来の中  
国民の独裁体制下におかれた。国民  
党が、日本を否定することで、自らの統  
治の正当性を成り立たせようとしたの  
は、やむを得ないことでもあった。そうし  
た習慣は今も、官僚やマスコミに根深く  
残っている。

一方、市内の一角には、駐在員を対象  
にしたクラブが密集して並んでおり、毎  
夜多くの日本人男性が遊び歩いている  
ことも確かである。「快樂台湾騒動」に興  
奮したテレビ局は、そうしたクラブ街の  
入口にカメラを据えて待ち構え、男が女

性を連れて出てくると、誰彼お構いな  
し、「あんた ホンジン？」と声をかける。  
慌てて逃げ惑う日本のおじさんが定時  
のコースで全国に放送されるといった按  
配で、マスコミの下劣さもさることなが  
ら、日本人男性の側も、お恥ずかしい限  
りである。高齢の台湾人が、ある日本人  
を指して、「あの人を尊敬しています」と  
いったことがあるが、その根拠は、「今まで  
一度も女を要求したことがないから」と  
いうものだった。それほど商売相手に女  
性をおねだりする日本人が多かったとい  
うことである。まことに情けない。

その昔男が台湾に行くといえれば、白い  
目で見られる時代があった。70年代、台  
湾当局は、新北投温泉にフリーセックス  
ゾーンを設け、日本人観光客を呼び込ん  
だ。政府と旅行業者が手を組んで、女性  
の肉体を商品に外貨を稼ごうとしたの  
である。盛況時には1000人以上の女  
性が働いていたとい、廃止後はそうした  
女性が大量に風俗産業に流れることにな  
った。

真に裁かれるべきは、女性の生き血を  
吸って私腹を肥やした輩であるはずだ  
が、そうした連中に対する批判も政府の  
政策で捨てられた女性たちのその後に  
関心をよせることもなく、ことあること  
にマッポンに過敏に反応し続ける台湾の  
政治家やマスコミにも困ったものである。